

# 漫画作品から絵本へ：『ムナーリの機械』の 制作過程に関する一考察

太田 岳人

## はじめに

絵画、彫刻やオブジェ、グラフィックや工業製品のデザインといった、複数の創作の範疇を横断しながら活躍したブルーノ・ムナーリ（1907-1998）は、20世紀を代表するイタリアの芸術家・デザイナーの一人として今日も高い評価を受けている。しかし、その膨大な仕事についての検証が本格的になされはじめたのは、2010年代に入ってからである。ごく近年に限って言えば、英語圏で初のムナーリについての研究論集が出版された<sup>(1)</sup>だけでなく、トリノのエットレ・フィーコ美術館で開かれた回顧展や、神奈川県立近代美術館など日本の4つの美術館を巡回した展覧会は、膨大な作品の提示だけにとどまらず、制作の一次史料としての多数のドローイングや試作品をも展示に組みこんでいたことで注目される<sup>(2)</sup>。しかし、彼の創作の過程や思考を示す史資料については、いまだ明らかになっていない点が多い。とりわけ、芸術家が自ら言及することの少なかった1930年代から40年代にかけてのそれらについては、発掘されるべき部分を大きく残している。

本稿の目的は、第二次世界大戦中の1942年にエイナウディ出版社から「子供と青年の叢書 Libri per l'infanzia e la gioventù」の一冊として刊行され、現在

では芸術家の「絵本」における最初期の代表作とみなされる『ムナーリの機械 Le macchine di Munari』<sup>(3)</sup>が、どのような過程を経て成立に至ったかを分析することである。以前論者は、ムナーリとイタリア内外の漫画文化の関係という観点からこの絵本の成立を論じ、モデルとなったアメリカのループ・ゴールドバーグ（1893-1970）の漫画、一コマ漫画や戯文を主に構成された「ユーモア紙 giornali umoristici」の存在、雑誌メディアの発展といった諸々の背景を分析しているが<sup>(4)</sup>、本稿はそれを踏まえつつ、ムナーリが実際に描いた作品の内容にさらに踏み込んだ考察を行う。すなわち、ユーモア紙『セッテベッロ Settebello』に、当初「漫画 vignetta」として発表されていた多くの「機械」の作例を、『ムナーリの機械』におけるそれと合わせて読み解くことで、両者のイメージの間で起こっている変容を突き止めるとともに、漫画から絵本に選ばれることのなかった作品の性格にも着目することで、自己形成期のムナーリの創作とそれをめぐる状況について明らかにしていきたい。

## 1. 『セッテベッロ』とムナーリの関わりの概略

前後の「はしがき」や「正誤表」を含め 32 頁で構成された『ムナーリの機械』は、13 点の「機械」のイメージを収録している。本作で言われる「機械」とは、電気や蒸気機関のような動力エネルギーにむしろ基づかず、その構成要素としては動物や人間も加わっている連鎖の過程である。各々の構成部分には数字が順番に振られて、一連の機構がどのように展開していくかについての説明が、特許状のように付されている。しかし、実際にその「機械」が行うのは基本的には他愛ないか、無意味なことばかりであり、そもそも図版に付せられた説明文や注釈すら、しばしば意味をなしていない。こうした、絵本に登場する「機械」の原型をムナーリが寄稿していたのが、1930 年代に隆盛を誇ったユーモア紙の一つであった『セッテベッロ』である<sup>(5)</sup>。

2019 年 3 月に論者は、フィレンツェ国立図書館に所蔵されていたものの、

最近まで長らく「技術的理由により」出庫が停止され閲覧不可能であった、この『セッテベッコ』紙のコレクションの再公開を受け、それを閲覧する機会を得た。そして、1939年6月から12月までの号を除く<sup>(6)</sup>、1938年1月から1941年12月の休刊にかけての同紙を集中的に閲覧した結果、1938年5月初頭から1939年5月末までの1年余りの時期を中心に、“Munari”もしくは“Mun”という署名がある、また“M”のイニシャルのみないしは無署名の作品であっても、画風や内容からこの芸術家の手によるものと考えられる作品や戯文の類が、合わせて50点余り描かれていたことが確認された<sup>(7)</sup>。

さて、『セッテベッコ』は、1931年にローマで創刊されたユーモア紙『マルカウレリオ Marc'Aurelio』を後追いする形で、1933年に同じローマで立ち上げられた。先行する『マルカウレリオ』や、輪転機印刷による雑誌ブームを牽引したリッツォーリ社が1936年に創刊した『ベルトルド Bertoldo』と競い合う形で、同紙も十万部単位での売り上げをあげていたとされている。しかし、他の二紙と比べて個性が薄いと考えられているのか、第二次世界大戦後から現在にいたるまでアンソロジーに類するものが編まれたことはない<sup>(8)</sup>。

『セッテベッコ』の転機となったのは、ミラノの出版界において、リッツォーリ社と各種のジャンルの雑誌の売り上げを競っていたモンダドーリ社によって、同紙の買収が1938年の春に行われたことである。1938年4月の『セッテベッコ』紙上には、新しい編集メンバーとして、従来からの同紙の寄稿者であった古参漫画家ガスタ（1889-1985）と詩人トリルッサ（1871-1950）の名前に加え、モンダドーリ社とつながりの深かったユーモア作家アキッレ・カンパニーレ（1902-1974）、当時同社の編集者でもあったチェーザレ・ザヴァッティーニ（1902-1989）、またライバル紙の『ベルトルド』から引き抜きを受け、最若手の編集メンバーとしての活躍も期待されていた漫画家ソール・スタインバーグ（1914-1999）が、編集部を中心となることが予告されている。

同紙にムナーリの名前が初めて現れたのは、1938年5月7日号に掲載され

た『セッテベッコ』の告知においてである【図1】<sup>(9)</sup>。専門のユーモア作家でなかったムナーリが突如、『セッテベッコ』にのみ寄稿を始めることになったのは、1930年代初頭より彼が紙面デザイナー・挿絵作家として活動する中で、ザヴァッティーニの編集する雑誌への寄稿やデザインを担当していた縁が大きいと推測される<sup>(10)</sup>。また、この告知のイラストを描いているスタインバーグも、ミラノにおけるムナーリの友人の一人であった<sup>(11)</sup>。ただし、ザヴァッティーニとスタインバーグという知己がいたことがムナーリの連載のきっかけになったとはいえ、紙面を通読する限り、必ずしも『セッテベッコ』紙の側から、彼の作品の独自性を理解して強く売り出そうとした気配は見られない。『セッテベッコ』には読み物の一環として、人気執筆者たちによる自身の近況報告や旅行報告<sup>(12)</sup>が時おり掲載されていたが、そうした埋め草的な記事にもムナーリの名前や姿が現れることがないことから、この点は明らかである。しかし、彼が紙面で目立たぬ存在だったことは、他の専門漫画家に用いられていなかった「機械」のアイデアについて、芸術家がより自由に展開する余地を与えたと考えられる。

【図1】 『セッテベッコ』1938年5月7日号より

1939年5月末、『セッテベッコ』は突如『エッコ Ecco』と改題され（以降の同紙は『エッコ・セッテベッコ Ecco-Settebello』とも呼ばれる）、再スタートを切った。この改組の明白な原因は不明であるものの、ほぼ同時期にモンドドーリ社の人気女性誌『グランディ・フィルム Grandi Firme』は、風俗への悪影響を及ぼしていると当局から圧力を受け、スタッフが新たな雑誌『ミリオーネ Millione』に移行したことが知られており、『セッテベッコ』の変化もそれに類するものであるという指摘がある<sup>(13)</sup>。『エッコ』への移行を、同紙は表面上喜ばしい再出発として自己広告も出しているが、その予告連載陣にムナーリの名前は出てこない。

前述した通り、論者は1939年6月から年末の時期までの『セッテベッコ』についての悉皆調査をするに至っていないものの、この6月にはモンドドーリ社が週刊グラフ雑誌『テンポ Tempo』を創刊し、ムナーリはその常勤グラフィック・デザイナーとして採用されている。よって、これ以降の彼が毎週の雑誌編集のおかげで、漫画の執筆に費やす時間を大きく減らしたであろうことは容易に推測できる。実際、翌1940年を通じて、『エッコ』紙に掲載されたムナーリの「機械」の漫画はわずか1点であった<sup>(14)</sup>。“Mun”の署名のある、おそらくムナーリの筆になる戯文<sup>(15)</sup>も1点確認されるが、その号をもってザヴァッティーニも編集長の座から去っていた。1941年には、同紙の権利がライバルのリッツォーリ社に買収され、再び題名を『セッテベッコ』と戻した上で、なおも同年の終わりまで刊行が続けられるが、すでにムナーリと同紙のつながりは切れていた。

## 2. 漫画から絵本への「機械」の移行

ムナーリが『セッテベッコ』紙にデビューしたのは、彼の名前が紙面で予告された翌号にあたる、1938年5月14日号に掲載された「ハエを殺す装置 Apparecchio per ammazzare le mosche」【図2】(vig. 1)によってであった。そ

れから約1年強の間に、彼は『セッテベッロ』に50点以上の寄稿を行ったが、当時のイタリアの芸能人や文化人のカリカチュアを詰め合わせた「寝台車、ローマーミラノ間」【図3】(vig. 4)や、他のユーモア作家が中心となっている記事のページへ短文や簡単なカットを提供している事例を除けば、彼の掲載作はほとんど「機械」を描いた作品に限られている。

当初、ムナーリは自己の作品に「～のための装置 *apparecchio per*」とシンプルな題名をつけていたが、間もなく「装置」という言葉の前後に「間違いない *infallibile*」「簡素にして効果的な *Semplice ed efficace*」といった形容をつけたり、説明部分の最後に「ムナーリの特許 *brevetto di Munari*」という但し書きを加えたりすることで、詞書と「機械」の内実との間のギャップをより引き立たせるようになる。また、1938年11月よりザヴァッティーニが紙面改革の一環として、新聞サイズの『セッテベッロ』紙の判型をおよそ四分の一のパンフレット型に一時的に改めると、ムナーリもこれに歩調を合わせるかのように、自作の

【図2】 ムナーリ「ハエを殺す装置」、『セッテベッロ』1938年5月14日号

【図3】 ムナーリ「寝台車、ローマーミラノ間」、『セッテベッロ』1938年5月21日号

漫画の中に、写真の断片の貼り付けという新しい手法を取り入れ始めた (vig. 23 以降)。さらに、多くの「機械」に“-ix”という語尾をもった固有名を与えていくことで、何かしら現実の(どこかうさんくさい) 商標登録を連想させる雰囲気を出そうとしている。『ムナーリの機械』に入っている、写真貼り付けを使った作品は1点のみ(後述の「干しブドウふりかけ機 Distributore di uvetta secca」)であり、“-ix”のアイデアも撤回されているが、こうした試みからは、絵本の段階以前から寄稿への慣れにともない、芸術家の創意工夫が進展していった様子が見て取れるであろう。

多くの専業ユーモア作家たちが、一コマ漫画や戯文を各号に複数寄稿するだけでなく、時には別のユーモア紙にも連載を持っていたのに対し、ムナーリは『セッテベッロ』に対してのみ「機械」を描き、その掲載数もおおむね毎週1点に限られていた。しかし『ムナーリの機械』に収録された「機械」のうち、「羽ばたき式扇風機 ventilatore ad ali battenti」(MM, pp. 6-7)を除く12例の図版は、いずれも『セッテベッロ』に掲載された「機械」の漫画に、その原型を発見することができる。

それでは、ムナーリは漫画として掲載された「機械」を絵本へと移行させる際、どのような変更を加えているのであろうか。たとえば、『ムナーリの機械』に出てくる「留守中でも笛を鳴らせる機械 Macchina per suonare il piffero anche quando non si è in casa」【図4】(MM, pp. 16-17)の図版の場合、4分音符や8分音符、あるいは笛から出ている文字といった細かい記号的表現以外は、鏡にはじまり小ガモへと行きつく「機械」の構成要素の数や配置まで、「留守中でも笛を鳴らせる心を打つ装置 Emozionante apparecchio per suonare il piffero anche quando non si è in casa」【図5】(vig. 21)をほぼ踏襲しているのが分かる。一方で、図に付された説明については、漫画版ではスペースの問題から比較的簡素になっているのに対し、絵本版ではそれが見開きの左側のページに移動されているため、より細かい形容や余剰な語りが加えられることにな

る。以下は、両者の解説テキストを試訳したものである。

【留守中でも笛を鳴らせる心を打つ装置】	【留守中でも笛を鳴らせる機械】
<p>鏡 (1) をのぞき込んでいる臆病者の雌ネコ (プーズィッレコの生まれ) (2) が籠 (3) の中に住んでいるネズミのマッティアーアを見いだす。雌ネコが後ずさりすると、古いチーズの油脂でべたついた綱 (4) にマッティアーアの鼻先を押しやる。マッティアーアがかじった綱が切れて、香りがつけられセロファンにくるまれたアイロン (5) が落とされる。落ちていくアイロンがコック (6) を開くと、圧縮空気が出てきて、それがチューブ (8) を通じて笛 (9) へと侵入して音へと変わる。笛の上には、ほとんど黒い色の水玉模様をした黄色い絹のリボンで、羽を一緒にまとめられた田舎者の若い小ガモ (10) がいるのだが、圧縮空気が熱すぎるので、この若い小ガモは火傷をしないように穴から穴へ跳ね回らざるをえなくなり、こうして心地よいメロディが即興で演奏される。</p>	<p>うまいこと傾けられた鏡 (1) の中に黒い (色に染められた) 雌ネコ (2) が籠 (3) の中に住んでいる青色ネズミのマッティアーアを見いだす。しかし、鏡がどんなものかについてネコに教える者などついでいかなかったから、われらが雌ネコは当然ながら、いくぶんかはネズミが怖いせいで、いくぶんかは今日新鮮な果物がいくらするかという、このご時世のせいで後ずさりしてしまう…。それでこのマッティアーアは、長時間熟成したパルミジャーノ・チーズのエキスが抜け目なくしみ込んだ綱 (4) に鼻先を近づけに来る。「われらが」雄ネズミはこの機会を逃しはしない、呪わしいこと！ 一口かじり、また一口。ロープが切れて、スマレの香りがついてセロファンにくるまれた炭火アイロン (5) が落ちる。アイロンの重みで引っ張られた別の細綱がバルブ (6) を開く。ボンベ (7) からはチューブ (8) をたどって、もう圧縮からとき放たれた空気が笛 (9) の中に侵入して音へと変わる。笛の上には、本絹のリボンで羽をしばられた田舎者の若い小ガモ (10) がいるのだが、笛から出てくる空気が熱すぎるので、この若い小ガモは穴から穴へ跳ね回らざるをえなくなる結果、心地よいメロディが即興で演奏される。</p>

漫画版の独自の「遊び」として、ムナーリは説明の中で、「臆病者の pusillanime」という言葉をナポリの地区名「プーズィッレコ Pusilleco」に掛けている。しかし、紙面のスペースの制限によって、文章全体は簡潔であり、作品にも現実的・事務的な雰囲気がお残っている。これに対し、絵本版の「機械」の説

【図4】 ムナーリ「留守中でも笛を鳴らせる機械」(図版部分)、『ムナーリの機械』17頁

明文は、各構成要素をより細かく描写し、語り調子のフレーズを追加することによって、作品の他愛のないホラ話らしさをより強めている。

【図5】 ムナーリ「留守中でも笛を鳴らせる心を打つ装置」、『セッテベッコ』1938年10月22日号

また、絵本において字数の制限が比較的弱いことは、漫画では目立たない「注釈」の領域を拡大することにもつながっている。その量は一行だけのものから本文を超えるものまで様々であるが、「留守中でも笛を鳴らせる機械」の場合には(a)から(d)までの箇条書きがついている。ただし、その内容は「アイロンにはスミレの香りがしなくてもよい」「青色ネズミはネズミとオウムの掛け合わせによってもたらされる」といった、本文に対して何の補足にもなっていない、さらなる無駄を加えるだけのものとなっている。初めて『ムナーリの機械』を日本語に翻訳した窪田富男は、同著の「ムナーリの宇宙」が「絵図と説明とノートを三位一体とした」ことから成り立っていると指摘しているが<sup>(16)</sup>、元々

の漫画の段階ではわずかな位置しか占めていない「ノート＝注釈」の領域の拡大は、図版－説明の二項による構成に割って入りつつ、作品のファンタジーの世界を確かに広げることにつながっていると見えよう。

「留守中でも笛を鳴らせる機械」が、元になった漫画の内実におおむね沿って描かれているのに対し、よりドラマティックな変化が加えられた事例もある。「しゃっくりに音楽性をもたらす雨の設備 *Congegno a pioggia per rendere musicale il singhiozzo*」【図6】(MM, pp. 26-27) は、「しゃっくりを音楽的にする悪魔的装置 *Diabolico apparecchio per rendere musicale il singhiozzo*」【図7】(vig. 22) と題された漫画の発想を踏まえており、最後に男の喉にベークライト製のホイッスルが飛び込む図版の左下部分や、ホイッスルの音階の一部がなぜ

【図6】 ムナーリ「しゃっくりに音楽性をもたらす雨の設備」(図版部分)、『ムナーリの機械』27頁

【図7】 ムナーリ「しゃっくりを音楽的にする悪魔的装置」、『セッテベッコ』1938年10月29日号

か方角を示す言葉で指定されているという説明の脱線を受けついでいる。しかし、連鎖反応のイメージの大部分は、別の漫画「ネオフィクス Neofix」【図8】(fig. 29) から採られたものである。後者は「オウムに没頭する老貴婦人」のほくろに羽の軸先を命中させるという目的のため、「紅海から集めた雲」、石膏でできたアスパラガスの束、空気で膨らんだ猫の皮といった、特に奇想天外な構成要素を要求しているものであるが、この「ネオフィクス」の最終部分のみが「悪魔的装置」のものに置き換わることで、二つの「機械」の合体がなされている。

さらに、ムナーリは漫画作品から絵本への移行にあたって、テキストや図版の構成要素だけでなく、漫画作品の内包する意味合いにも手を加えることが

【図8】 ムナーリ「ネオフィクス」、『セッテベッコ』1938年12月1日号

【図9】 ムナーリ「スイムルタニクス」、『セッテベッコ』1939年3月9日号

あった。このことは1939年3月9日号に掲載された「スイムルタニクス Simultanix」【図9】(vig. 45)の変容に顕著である。「スイムルタニクス」は、『セッテベッロ』に現れた「機械」の中でも特異なものである。すなわち、「心地よく目覚め最短時間で起き上がるための拡張・多元・同時的な最新式目覚まし時計」という副題にもあるように、複数の用途を「同時に simuluteneo」こなすことが謳われているからである。ハンマーつきの目覚ましのベル時計の針が糸を切ることにより、最終的にこの仕掛けはコーヒーを沸かすだけでなく、家の扉まで開けてくれる。個々の構成要素の連鎖がありえないという点で、「スイムルタニクス」は他のムナーリの「機械」たちと一緒にあるものの、前者はわずか2つとはいえ、複数の事柄を同時に行ってしまうている。ここではある意味、現実の世界の機械に求められる「功利性」——それは副題で謳われているように「最も近代的 modernissima」であるための要素である——が、いつの間にか実現されてしまっているかにも見える。

この漫画から主な構成要素を借りながら、内実は大きく異なっているのが「目覚まし時計を飼い馴らす機械 *Macchina per addomesticare le sveglie*」(MM, pp. 4-5)である。漫画と絵本の図版を比べると、前者では下部に描かれている寝室の様子が、後者では削除されているのがまず目につく。しかしより重要なのは、後者の図版においては、「機械」の目覚まし時計のベルの部分がスポンジに置き換えられ、最初から音が鳴らないようにされていることである。後者の「目覚まし時計を飼い馴らす」というフレーズだけ読むと、「機械」が時計に作用すると錯覚しそうになるが、すでに音の問題は存在していないので、実のところこの題辞そのものが矛盾をきたしていることになる。さらにこの「機械」の目的は、コーヒーメーカー（絵本ではクックマ *cuccuma* と指定されている）を沸かすことだけへと不便にも縮小されているばかりか、説明文の最後は「クックマ」という言葉の響きが好きだという個人的感想へと脱線してってしまうなど、作品全体のナンセンス性がことに際立つものとなっている。元

の漫画と比べさらに不条理なこの作品を、あえて『ムナーリの機械』の最初に持ってきているところに、著者の意図と自信を読み取れるであろう。

### 3. 『ムナーリの機械』に収録されなかったもの

ムナーリが『セッテベッコ』に描いた「機械」のうち、そこから『ムナーリの機械』に採用されなかったものについては、どのように考えるべきだろうか。この取捨選択の問題については、単純に絵本に使える紙数（出版は戦時下で行われた）とのかね合い、個々の漫画作品のもともとの完成度の問題も考えなくてはならないが、ここでは、連載漫画と比べてより独立した自分の世界を提示しうるものとしての単行本から、作者がどういったタイプの要素、あるいは漫画作品を取り除こうとしたかを考察したい。

まず考慮に入りたいのは、ムナーリが「機械」の原型となる漫画を提供したユーモア紙というジャンルが、『コッリエーレ・デイ・ピッコリ *Corriere dei piccoli*』（1908-1995）のような明らかに子供をターゲットにした漫画や読み物を載せた媒体と異なり、基本的に成人読者を読者としたものであったことである。従来学術書や文学をもっぱらとしていた、エイナウディ社が新しい読者を切り開く目的で立てられた「子供と青年の叢書」の企画によって生まれた『ムナーリの機械』においては、元々の漫画にあった刺激的・攻撃的と言える単語や軽口を、修正してできた作品が存在する。

「なまけものの犬のためのしっぽ振り機 *Agitatori di coda per cani pigri*」（MM, pp. 20-21）は、あまりにもものらくら者であご置きや耳置きまで使っている「犬のための」ものであり、そんな犬がしっぽ振りをして人間の側が喜ぶのかどうかと読者に思わせるものであるが、この原案になっている作品は「麻痺した犬にしっぽを振らせる装置 *Apparecchio per muovere la coda ai cani paralitici*」【図 10】（*fig. 6*）と題されている。「麻痺した *paralitici*」という言葉は「なまけものの *pigri*」と比べ、病気やケガをしているかのような響きを持っている。こ

の漫画の説明文では「犬ささえ reggi-cani」にあごと耳を置いている犬の健康状態については特に語られていないが、こうした用語の選択は、「機械」が意図しているはずの滑稽さの演出とは何かかみ合っていない印象を受ける。他にも『ムナーリの機械』に採用されなかった『セッテベッコ』掲載作の中には、機械の効果にうっとりした顔の猫に対し、突然「お前の口を蹴っ飛ばしてやってもいいんだぞ」といった脅し文句が現れる「猫をなでる装置 *Apparecchio per accarezzare i gatti*」(vig. 3) や、注釈部分で「誰もがご存じのとおり、賢い牛より間抜けな牛の肉の方がおいしい」という「黒いユーモア」的なフレーズが添えられた「子牛を間抜けにする装置 *Notevole apparecchio per incretinire i vitelli*」(vig. 13) など、何か動物を邪険に扱うようなものが時々見受けられる。

しかし、『セッテベッコ』のムナーリの漫画に感じられる攻撃性について考える上では、1922年のファシズム政権の成立が漫画の世界に及ぼした影響も見逃してはならないであろう。ファシズム勢力に批判的という意味での「政治風刺 *satira politica*」という漫画ジャンルは、1920年代に国内の多くの新聞雑誌とともに弾圧を受け、1930年代においては存在していない<sup>(17)</sup>。メディアを管理する様々な法令や通達の中でも、ユーモア紙に対するそれとしては、ムナーリの『セッテベッコ』寄稿開始以前の1937年1月に、出版宣伝省大臣ディーノ・アルフィエーリ(1886-1966)が発した「覚書 *promemoria*」が有名

【図10】 ムナーリ「麻痺した犬にしっぽを振らせる装置」、『セッテベッコ』1938年6月18日号

である。「覚書」は主要なユーモア紙に対して、ファシズム政権下で否定される諸テーマ、その逆に推奨される諸テーマを挙げた上で、「ユーモア雑誌は、ファシズムが教える生活様式と調和しないあらゆる態度を攻撃の対象とする、厳格な義務を担っているのである」と結論するものであった<sup>(18)</sup>。

1942年の『ムナーリの機械』の中には、このような政権側の要請に直接答えようとしている作品は見られない。しかし、その原作としての『セッテベッコ』に掲載された「機械」の段階では、そうした政治指導が透けて見えるものが存在している。たとえば「干しブドウふりかけ機」(MM, pp. 24-25)の原型となった、1939年1月5日号掲載の「ブリランティクス Brilliantix」【図11】(vig. 35)

【図11】 ムナーリ「ブリランティクス」、『セッテベッコ』  
1939年1月5日号

には、「ファシスト的倫理と対比をなす、いくつかの上流層の環境についての風刺」を見出すことができる。「干しブドウふりかけ機」と「ブリランティクス」はともに、本来は読者の笑いを誘うはずである、構成要素の連鎖反応そのものを提示しないという実験性をはじめ、構成要素の数と位置関係、解説文の内容なども通底している。しかし「ブリランティクス」の目的は、プディングではなく「整髪料に没頭する男 un uomo dedito alla brillantina」の頭に、干しブドウではなくガチョウの羽を吹きつけることで、髪をベタベタさせた若者の「恥辱を覆い隠す」こととされている。この作品以外にも、『ムナーリの機械』に継承されることのなかった漫画作品ではしばしば、燕尾服へこだわりを見せる、社交界で遊びまわるといった、「ファシスト的倫理」から見てくだらない

身だしなみや振る舞いにうつつを抜かしているとされる人々が、「機械」の連鎖の最終的な作用対象にされることが起こっている (vig. 31, 33 など)。

ただし、「干しブドウふりかけ機」と「ブリランティクス」の間においては、別の興味深い変更も見出せる。詞書のみで示される連鎖反応の後半部分は、ブロック塀の裏で悲鳴をあげた雄クジャクに対し、岩の裏をこっそりのぞいていた、織機の裏の「クジャクのいいなづけ」が反応して発生すると説明されている。だが「干しブドウふりかけ機」では岩の背後にいたのが「一本の足が木になっている馬 un cavallo con una gamba di legno」であるのに対し、「ブリランティクス」では「別の裸の雄クジャク un altro pavone nudo」である。つまり元の漫画においては、異性の裸を、しかも女性が男性を「のぞく spiare」という、大人の読者向けのエロティシズムへの言及が存在している。「裸の雄クジャク」が義足の馬に変更された理由が、絵本の著された1942年の時点における検閲の厳しさによるものか、エイナウディ社が「子供と青年の叢書」としてふさわしくないと考えたためかは不明である。しかし、漫画に現れた一節からは、1937年の「覚書」で示されていた「あらゆる悪しきポルノグラフィ的な特徴を避ける」という当局の方針への、ムナーリによるささやかな反抗を読み取ることも不可能ではないであろう。

ムナーリの作品も含め、同時期のファシズム政権の路線がユーモア紙の作品に与えていたもう一つの影響は、「ファシズムと対比をなす政治的な態度かつ精神性」を有するとされた他国への揶揄的言説、加えてそれと密接な関係を有する人種主義の鼓吹である。エチオピア征服戦争（1935-1936）以降、スペイン内戦介入（1936-1939）にも連続していったファシズム政権の対外戦争は、諸外国との関係を大幅に悪化させただけでなく、ナチス・ドイツとの接近を深め、1938年11月には悪名高い反ユダヤ主義的人種法の制定がなされるに至った。ルーマニアのユダヤ系家庭の生まれであったスタインバーグは、『セッテベッロ』編集部員としても活躍を期待されていたにもかかわらず、同年9月に

は紙面の奥付からその名を消し、顕名での漫画発表も制限されることになった（後にアメリカへ亡命）。

そうした状況で、ムナーリの『セッテベッコ』への寄稿においては、その「機械」のナンセンスな世界に、無理やり仮想敵国の「フランス」や「イギリス」を接合したものが登場することになる。1938年の年末に「フランスに捧げる」と題された、同紙の特別号に掲載された「フランチェーズィゼクス Francesizex」【図 12】（vig. 34）は「純粋な大型雑種犬 pura razza bastardona」がフランスに「帰化 naturalizzazione」するための書類に、

【図 12】 ムナーリ「フランチェーズィゼクス」、『セッテベッコ』1938年12月29日号

足で印を押すための「機械」である。「雑種犬」という表現は、「純粋なアーリア人」であるイタリア人に対するユダヤ人、もしくはアフリカ植民地から来る黒人兵士を受け入れる諸国が「雑種化」してしまうという、イタリアで当時猛威を振っていた人種主義キャンペーンのコノテーションを当然含んでいる。実際、この作品が掲載されている左隣のスペースには、ユダヤ人風の「ザムエーレ」の像が、町に行く男が財布を落とすのを見て像のはずなのに動き出すという、「金銭に目がないユダヤ人」というイメージをむき出しにした4コマ漫画「ジュゼッペの小話」が配されている<sup>(19)</sup>。

しかし、「フランチェーズィゼクス」単体を取り出してみれば、「雑種犬」の描写はとりたてて醜悪にはなされておらず、その表情はむしろとぼけた感じをしている。「純粋」な「雑種」という表現にも語義矛盾があるし、図の説明の中で「本当なのだ è vero」というフレーズを逐一、しかし無意味に繰り返すと

ころなどは、どこか人種法の虚偽の無理な言いくるめにも聞こえる。ここでムナーリは、消極的な形ではあったが、人種主義への賛同ではなく懐疑を示したと見ることも可能であろう<sup>(20)</sup>。

フランスと同じ国際連盟の理事国である、イギリスを題材にした「グランブレティクス Granbretix」【図13】(vig. 51)は、戦争の暗雲が近づいている時期において「勇猛なイタリア人と異なり、イギリス人は募兵に応じない」といったコノテーションが前提となっている。「装置」の構成要素の中には、「長老(野党の)アトリー [Attle / ママ] を象った鶏のゼラチン製半胸像」、首相である「[ネヴィル・] チェンバレンの傘」といった、イギリスの二大政党の指導者への奇妙な言及が同時に登場する。説明によれば、イギリス軍のヘルメットが、髭剃りの際の洗面器として使えることは「全世界の軍にイギリス軍が優越する」証拠であり、それを示すスローモーションの映画を見て、「少々間抜けになってしまった」町の男性が募兵に応じてしまう。ご丁寧にも、説明の最後は「ゴッド・セーブ・ザ・キング Dio Salvi il Re」と締めくくられている。

【図13】 ムナーリ「グランブレティクス」、『セツテベッロ』

1939年4月20日号

こちらの内容は、「フランチェーズイゼクス」と比べて非常に手が込んであるだけでなく、「自由主義」「民主主義」へのより悪意ある毒気を含むようでもあり、単純にナンセンスが炸裂したととるべきかどうかはさらに微妙なところである。しかし一方で、光電管の光の「パシャリ tac」、溶けたゼラチンの落ちる「ポタリ toc」、傘がスイッチにあたる「カチャリ tic」という、説明で余剰となる効果音を入れることで、作品が深刻な罵倒にのみ振り切らないような、何かしらの曖昧な要素が挿入されていることも見逃せない。「風刺」が何かしらの国際的・社会的事象に対する機知ある反応ではなく、直截に他者を単純化・悪魔化してこき下ろすクリシェの山となることが、ファシズム政権が要求した「ユーモア」であったとするならば、ムナーリの『セッテベッロ』に連載された「機械」は、『ムナーリの機械』には移行されることのなかった、当局の推奨するテーマに合わせた妥協が行われたものにおいても、その種の「ユーモア」を回避しようとする契機が潜んでいたと言えるだろう。

## おわりに

本論は、『ムナーリの機械』が成立したプロセスについて、絵本に出現する「機械」の元となったアイデアが表れた『セッテベッロ』紙の漫画群を、創作の一次資料として捉えながら分析を行った。今後は、ユーモア紙におけるムナーリの活動についての調査の補完を期しつつ、『ムナーリの機械』の出版直前からなされていたと推測される、芸術家とエイナウディ社の編集者とのやり取りや、彼らとファシズム政権の検閲とのやり取りを示す資料の探索も行っていきたい。

ムナーリが『セッテベッロ』に「機械」の漫画を集中的に寄稿したのは、第二次世界大戦が近づき国内外の緊張が高まっていた時期であり、しばしば彼も自作を当局の推奨される路線に沿う形で描くことがあった。しかし、彼のナンセンスな図版や説明によってそうした要素は、少なくとも部分的に中和されて

いる。そして、「機械」のアイデアを絵本の形にする際には、政治色・時事色の入った作品をその中に混入させることなく、また元の漫画のアイデアに注釈のような攪乱的要素を積極的に盛り込むことによって、よりナンセンスなファンタジーとしての自己の世界を提示・拡張していた。こうした取捨選択を経て、はじめて『ムナーリの機械』は、現代でも子供から大人まで幅広い読者の眼に耐えうる内容を備えるものとなったと言えよう。

#### 注

- (1) Antonelli, Nandelli and Zanoletti (2017).
- (2) Cerritelli (2017)、高嶋ほか (2018)。これらの展覧会の意義については太田 (2018) も参照。
- (3) 初版は *Le macchine di Munari*, Torino, Einaudi, 1942。日本で出版された二度の翻訳のうち、窪田訳 (1979) は 1974 年のエイナウディ社の版を、中山訳 (2009) は初版を再現した 2001 年のコッライニ社版を底本としている。本論での『ムナーリの機械』からの引用は、これら二つの先行訳を参照しつつも、現在も流通しているコッライニ社版 (以下、本文では MM と略) からの拙訳に基づく。
- (4) 太田 (2016)。
- (5) 『セッテベッロ』の歴史については、Carpi (2002: 64-90) および Coarelli e Imperioso (2005) を参照。
- (6) この時期の部分のみ、フィレンツェでかつて発生した「1966 年の洪水による破損」のため、現在も使用不可とされていた。相当の規模で流布していたものの、媒体の性格上読み捨てになることの多かったユーモア紙は、各地の図書館の所蔵対象にもなりづらく、普通の新聞雑誌のそれと比べて揃いが不十分であることが多いが、この欠落は今後の調査でいずれ補いたい。
- (7) 本稿では巻末の【資料】として、1938 年 5 月から 1939 年 5 月にかけての『セッテベッロ』に掲載されたムナーリの作品の情報について、脚注とは別個にまとめた。各作品には、時系列順に仮の作品番号 (vig.) を付した。

明確な署名のない漫画の作者の同定は、論者の判断による。たとえば、無署名の「彼らは帝国通りをどのように飾るか」(vig. 2) は、描線の特徴がムナーリに近いことをはじめ、アルトゥーロ・マルティーニ (1883-1947) やピエール・マリア・バルディ (1900-1991) といった、現在でも美術史の俎上に載せられることの多いこの時代のミ

ラノの芸術家について、それぞれの作風を理解したうえで戯画に落とし込んでいること、さらに「芸術家」たちの名前の中へ諧謔的に友人のスタインバーグの名前を紛れ込ませていることなどから、ムナーリの手になる可能性が高いと推定した。

- (8) 21世紀に入りイタリアで出版された、辞典的書物における同紙の解説においても、同紙の発行開始の年やザヴァッティエニの編集長就任の年といった、基本情報の著述に少なからぬ誤りが散見される。Bono (2002-2003: vol. 2, p. 1723)。
- (9) “Il nuovo Settebello”, in *Settebello*, n. 235, 7 mag. 1938, p. 1.
- (10) 太田 (2016: 13-15)
- (11) 後年のムナーリの発言によれば、1936年時点の彼は、スタインバーグと一緒に『ベルトルド』紙への寄稿を計画していたという。Munari (1971: 12)
- (12) Anonimo, ““Il settebello” a Cinecittà”, in *Settebello*, n. 288, 11 mag. 1939, p. 9.
- (13) Carpi (2002: 78-79).
- (14) Munari, “Come funzionano le mine magnetiche”, in *Settebello*, n. 326, 1 feb. 1940, p. 4.
- (15) Mun. (Munari?), “Ultime notizie”, in *Settebello*, n. 360, 26 set. 1940, p. 6.
- (16) 窪田訳 (1979: 71)。
- (17) 反ファシズム的ユーモア紙の存在については、Del Buono (1976: 9-52) および Chiesa (1990: 32-57) を見よ。
- (18) 「覚書」のテキストは、Chiesa (1990: 122) や Mangini e Pallottino (1994: 178) などにも掲載されている。その主要7項目の試訳および性格の分析は、太田 (2016: 11-13) を見よ。
- (19) Anonimo, “Storiella di Giuseppe”, in *Settebello*, 29 dic. 1938, p. 20.
- (20) 他にもムナーリは、フランスが直接のテーマではないものの、1938年4月までフランスの首相であったユダヤ人政治家レオン・ブルム (1872-1950) が、「機械」の構成要素として無関係に登場する漫画も1点描いている (vig. 25)。ここでのブルムは「目下『ある狂人の追憶』という本の20ページに登場する」とされ、「機械の一部でいたくない」が結局その連鎖の一端を担わされてしまう存在であるものの、すでに一部では罵倒的なコノテーションを有していた「ユダヤ人 (ebreo)」という形容までは背負わされていない。

## 参考文献

【『ムナーリの機械』、底本および参考訳】

MM Bruno Munari, *Le macchine di Munari*, Mantova, Corraini, 2001.

窪田訳 『ナンセンスの機械』、窪田富男訳、筑摩書房、1979.

中山訳 『ムナーリの機械』、中山エツ子訳、河出書房新社、2009.

**【同時代のユーモア紙】**

*Settebello* (1938-1941)

**【ムナーリおよび大戦間期の芸術・文化】**

Antonello P., Nandelli M. and Zanoletti M. (eds.)

2017 *Bruno Munari: the lightness of Art*, Oxford, Peter Lang.

Bono G. (a cura di)

2002-2003, *Guida al fumetto italiano*. 2 voll., Milano, Epierre (II ed.).

Carpi M.

2002 *Cesare Zavattini direttore editoriale*, Reggio Emilia, Aliberti.

Cerritelli C. (a cura di)

2017 *Bruno Munari: artista totale/ total artist*, Mantova, Corraini.

Chiesa A.

1990 *La Satira politica in Italia*, Roma-Bari, Laterza.

Coarelli R. e Imperioso A. M.

2005 *Le donne e "Il Settebello", settimanale umoristico di Achille Campanile e Cesare Zavattini*, in *Contemporanea*, vol. 8, 485-495.

Del Buono O.

1976 *Poco da ridere: storia privata della satira politica dall' "Asino" a "Linus"*, Bari, De Donato.

Mangini C. e Pallottino P.,

1994 *Bertoldo e i suoi illustratori*, Nuoro, Ilisso.

Munari, B. (a cura di Fossati P.)

1971 *Codice ovvio*, Torino, Einaudi.

太田岳人

2016 「『ムナーリの機械』の起源：漫画文化との関連を中心に」、『イタリア学会誌』第66号、口絵I-II頁、本文1-20頁。

2018 「ブルーノ・ムナーリ、その歴史的座標」、『カザベラ・ジャパン』第889号、日本語版冊子25-27頁。

高嶋雄一郎ほか（編）

2018 『ブルーノ・ムナーリ展』、求龍堂。

【資料】『セツテベッコ』(1938年5月～1939年5月)に掲載された、ムナーリの漫画・戯文リスト(推定含む)

作品番号 (vig.)	署名	号数	日付	頁数	題名	漫画を元にしたと考えられる 『ムナーリの機械』収録作品
1	Munari	236	14 mag. 1938	4	Apparecchio per ammazzare le mosche	
2	Anonimo (Munari?)	236	21 mag. 1938	2	Come avrebbero decorato Via Impero	
3	Munari	237	21 mag. 1938	4	Apparecchio per accarezzare i gatti	
4	Munari	237	21 mag. 1938	5	Letti Roma-Milano	
5	Munari	239	4 giu. 1938	5	Letti Milano-Roma	
6	Munari	241	18 giu. 1938	4	Apparecchio per muovere la coda ai cani paralitici	Agitatori di coda per cani pigri (MM, pp. 20-21)
7	Munari	242	25 giu. 1938	4	Apparecchio per fumare le sigarette	
8	Munari	244	9 lug. 1938	4	Apparecchio per sventolare il fazzoletto alla partenza dei treni	Sventolatore di fazzoletti alla partenza dei treni (MM, pp. 28-29)
9	Munari	246	23 lug. 1938	3	Infallibile apparecchio per fare i tutti acrobatici	
10	Munari	247	30 lug. 1938	5	Semplice ed efficace apparecchio per dare e riposo a chi deve restare	
11	Munari	248	6 ago. 1938	5	Apparecchio per verificare se le monete sono buone o false	
12	Munari	250	20 ago. 1938	5	Premiato apparecchio per verniciare in viola la faccia dei giovani mondani	
13	Munari	251	26 ago. 1938	5	Notevole apparecchio per incretinare i vitelli	

作品番号 (vig.)	署名	号数	日付	頁数	題名	漫画を元にしたと考えられる 『ムナーリの機械』収録作品
14	Munari	252	3 set. 1938	5	Ricerchissimo apparecchio per far tacere la radio del vicino	
15	Munari	253	10 set. 1938	5	Apparecchio per spolverare la giacca agli Spavenfapasseri [sic.]	
16	Munari	254	17 set. 1938	4	Recondito apparecchio per grattare la testa a chi ha una grande preoccupazione	
17	Munari	255	24 set. 1938	4	Subdolo apparecchio per mantenere l'abbronzatura	
18	Munari	256	1 ott. 1938	4	Decisivo apparecchio per favorire le visite brevi	
19	Munari	257	8 ott. 1938	4	Tempestivo apparecchio per aprire, dal di sotto, le bottiglie di spumante	Apparecchio per aprire dal disotto le bottiglie di spumante (MM, pp. 22-23)
20	Munari	258	15 ott. 1938	4	Suggestivo apparecchio per annusare i fiori finti	Meccanismo per annusare i fiori (MM, pp. 10-11)
21	Munari	259	22 ott. 1938	4	Emozionante apparecchio per suonare il piffero anche quando non si è in casa	Macchina per suonare il piffero anche quando non si è in casa (MM, pp. 16-17)
22	Munari	260	29 ott. 1938	4	Diabolico apparecchio per rendere musicale il singhiozzo	Congegno a pioggia per rendere musicale il singhiozzo (MM, pp. 26-27) ※最後の部分のみ

23	Munari	261	8 nov. 1938	4	Apparecchio clandestino per vincere la malinconia	
24	M (Munari?)	261	8 nov. 1938	18	Ci è stato promesso dall'azienda tranviaria...	
25	Munari	262	10 nov. 1938	19	Autofix: memorabile apparecchio per prolungare l'autunno ad uso dei poeti in cerca d'ispirazione	
26	Mario Brancacci e altri (incluso Munari)	263	17 nov. 1938	16-17	Ingresso alle 9	
27	Munari	263	17 nov. 1938	24	Tramstop: chimerico apparecchio per fermare il tram	
28	Munari	264	17 nov. 1938	21	Ovosodx: preciso apparecchio per misurare il tempo di cottura delle uova da tirare in fronte a quelli che tengono l'unghia del mignolo più lunga delle altre	Misuratore automatico del tempo di cottura (MM, pp. 14-15)
29	Munari	265	1 dic. 1938	19	Neofix: simbolico apparecchio per adornare con piume di pavone i nei delle vecchie signore dedite ai papagalli	Congegno a pioggia per rendere musicale il singhiozzo (MM, pp. 26-27) ※最後の部分を除く
30	Munari	266	8 dic. 1938	25	Timidrex: romantico apparecchio per vincere la timidezza	Distributore di uvetta secca (MM, pp. 24-25)
31	Munari	267	15 dic. 1938	20	Polemix: nobile apparecchio per incendiare la coda ai polemisti da salotto dediti al baciamento	

作品番号 (vig.)	署名	号数	日付	頁数	題名	漫画を元にしたと考えられる 『ムナーリの機械』収録作品
32	Munari	267	15 dic. 1938	26	Abbiamo mandato Munari... al cino- dromo	
33	Munari	268	22 dic. 1938	28	Fracflex: caratteristico apparecchio per dimenare la coda del frac ad uso dei vitaioi muti che vogliono manifestare la loro contentezza per l'invito della Baronezza [sic.]	
34	Munari	269	29 dic. 1938	20	Francesizez: tipico apparecchio per naturalizzare i cani randagi orfani di padre, madre e patria; ad uso delle nobili famiglie parigine	
35	Munari	270	5 gen. 1939	19	Brillantix: timido apparecchio per sep- pellire sotto una pioggia di piume d'oca, la testa dei giovani seduttori déditi alla brillantina	
36	Munari	271	12 gen. 1939	9	Flirtex: apparecchio per seminare le melanzane nel cranietto di quelle signore convinte di essere moderne perché dedicano metà della loro esi- stenza al flirt (scusatemi) e l'altra metà a incipriarsi i talloni	
37	Munari	272	19 gen. 1939	9	Distributore automatico di pernac- chiette e ascigamani banagti...	
38	Munari	273	26 gen. 1939	9	Centellinix: facoltativo apparecchio per certellinare i calci artificiali, ad uso degli Ultimi Esterofili	

39	Munari	274	2 feb. 1939	9	Antigut: tempestivo apparecchio per soffiarsi il naso pur tenendo le mani in tasca	
40	Munari	274	2 feb. 1939	12-13	Moda	
41	Munari	275	9 feb. 1939	9	Doremix: questo magnetico apparecchio serve per lanciare una stella filante Upim.....	
42	Munari	276	16 feb. 1939	9	Bondix: apparecchio sibillino (ma tuttavia automatico) per prevedere l'aurora	Apparecchio per prevedere l'aurora (MM, pp. 18-19)
43	Munari	277	23 feb. 1939	9	Pelux: modesto apparecchio a base di gatti turchi per farsi la barba di notte al lume di rocca	
44	Munari	278	2 mar. 1939	9	Pro vegliardetti: pio apparecchio per premasticare le castagne secche ad uso dei vegliardetti senza denti	
45	Munari	279	9 mar. 1939	4	Simultanix: modernissima sveglia amplificata multipla e simultanea per svegliarsi bene ed alzarsi nel minor tempo	Macchina per addomesticare le sveglie (MM, pp. 4-5)
46	Munari	280	16 mar. 1939	4	Tremolix: mimetico e opportuno apparecchio democratico per far ingoiare la famosa pillola contro la paura	
47	Munari	281	23 mar. 1939	5	Sirenix: piffero a vela, solido (?) e ceruleo, di facile applicazione su qualsiasi tipo di zattera. Naufraghi! Preferitelo ovunque e comunque (sic).	

作品番号 (vig.)	署名	号数	日付	頁数	題名	漫画を元にしたと考えられる 『ムナーリの機械』収録作品
48	Munari	282	30 mar. 1939	5	Terapix: terapeutico apparecchio per distrarre quei clandestini che, in tram, cercano di leggere tutto il giornale del vicino	
49	Munari	283	6 apr. 1939	5	Velocix: apparecchio zoofilo per motorizzare le tartarughe allo scopo metafisico di condurle al passo col grosso	Motore a lucertola per tartarughe stanche (MM, pp. 8-9)
50	Munari	284	13 apr. 1939	15	Prefidanzix: roseo apparecchio da allenamento per pregustare l'infilamento dell'anello ad uso delle signorine che stanno per essere fidanzate	
51	Munari	285	20 apr. 1939	5	Granbretix: londinese e pittoresco apparecchio per invitare i passanti ad arruolarsi volontariamente nell'esercito inglese	
52	Munari	286	27 apr. 1939	5	Condux: preciso apparecchio per mescolare l'insalata ad uso dei cinque buongustai monzesi che non hanno tempo da perdere	
53	M (Munari?)	287	4 mag. 1939	6	Dizionarietto cinematografico	
54	Munari	287	4 mag. 1939	9	Zanz: spasmodico apparecchio per mortificare le zanzare	Mortificatore per zanzare (MM, pp. 12-13)